

雪の翼

泉鏡花

青空文庫

かしはぎきかいぐんせうゐの夫人に、民子といつて、一昨年故郷なる、福井で結婚の式を

柏崎海軍少尉の夫人に、民子といつて、一昨年故郷なる、福井で結婚の式をあげて、佐世保に移住んだのが、今度少尉が出征に就き、親里の福井に歸り、神佛を祈り、影膳据まつ座にある如く、家を守つて居るのがあつた。

旅順の吉報傳はるとともに幾干の猛將勇士、或は士卒——或は傷つき骨も皮も散々に、影も留めぬさへある中に夫は天晴の功名として、唯纜に左の手に微傷を受けたばかりと聞いた時、且つ其の乗組んだ艦の帆柱に、夕陽の光を浴びて、一羽雪の如き鷹の來り留つた報を受け取つた時、連添ふ身の民子は如何に感じたらう。あはれ新婚の式を擧げて、一年の衾暖かならず、戦地に向つて出立つた折には、忍んで泣かなかつたのも、嬉涙に暮れたのであつた。

あゝ、其のよろこびの涙も、夜は片敷いて帯も解かぬ留守の袖に乾きもあへず、飛報は鎮守府の病院より、一家の魂を消しに來た。

少尉が病んで、豫後不良とのことである。

此の急信は××年××月××日、午後三時に届いたので、民子は蒼くなつて衝と立つと、不斷着に繻子の帯引緊めて、つかくと玄關へ。父親が佛壇に御明を點ず

る間に、母親は、財布の紐を結へながら、駈けて出て之を懷中に入れさせる、女中がシヨオルをきせかける、隣の女房が、急いで腕車を仕立に行く、とかうする内、お供に立つべき與曾平といふ親仁、身支度をするといふ始末。さて、取るものも取りあへず福井の市を出發した。これが鎮守府の病院に、夫を見舞ふ首途であつた。

冬の日の、山國の、名にしおふ越路なり、其日は空も曇りたれば、漸く町をはづれると、九頭龍川の川面に、早や夕暮の色を籠めて、暗くなりゆく水蒼く、早瀬亂れて鳴る音も、千々に碎けて立つ波も、雪や！其の雪の思ひ遣らるゝ空模様。近江の國へ山越に、出づるまでには、中の河内、木の芽峠が、尤も近きは目の前に、春日野峠を控へたれば、頂の雲眉を蔽うて、道のほど五里あまり、武生の宿に着いた頃、日はとつぷりと暮れ果てた。

長旅は抱へたり、前に峠を望んだれば、夜を籠めてなど思ひも寄らず、柳屋といふに宿を取る。

路すがら手も足も冷え凍り、火鉢の上へ突伏しても、身ぶるひやまぬ寒さであつたが、枕に就いて初夜過ぐる頃ほひより、少し氣候がゆるんだと思ふと、凡そ手掌ほどあらうといふ、俗に牡丹となづくる雪が、しとくと果しもあらず降出して、夜中頃には武

生の町を笠のやうに押被せた、御嶽といふ一座の峰、根こそぎ一搖れ、揺れたかと思ふ氣勢がして、風さへ颯と吹き添つた。

一の谷、二の谷、三の谷、四の谷かけて、山々峰々縦横に、荒れに荒れゝが手に取るやう、大波の寄せては返すに齊しく、此の一夜に北國空にあらゆる雪を、震ひ落すこと、凄まじい。

民子は一炊の夢も結ばず。あけ方に風は凪いだ。

昨夜雇つた腕車が二臺、雪の門を叩いたので、主従は、朝餉の支度も、々に、身ごしらへして、戸外に出ると、東雲の色とも分かず黄昏の空とも見えず、溟々濛々として、天地唯一白。

不意に積つた雪なれば、雪車と申しても間に合ず、ともかくもお車を。帳場から此處へ参る内も、此の通りの大汗と、四人の車夫は口を揃へ、精一杯、後押で、お供はいたして見まするけれども、前途のお請合はいたされず。何はしかれ車の齒の埋まりますまで、遣るとしませう。其上は、三人がかり五人がかり、三井寺の鐘をかつぐ力づくでは、とても一寸も動きはしませぬ。お約束なれば當柳屋の顔立に参つたまで、と、しり込すること一方ならず。唯急ぎに急がれて、こゝに心なき主従よりも、御機

嫌^{げん}ようと門^{かど}に立^たつて、一^{ひと}曳^ひければ降^ふる雪^{ゆき}に、母衣^{ほろ}の形^{かたち}も早^はや隠^{かく}れて、殷々^{いんく}として沈^{しづ}み
行^ゆく客^{きやく}を見送^{みおく}る宿^{やど}のものが、却^{かへ}つて心^{こころ}細^{ほそ}い限^{かぎ}りであつた。

酒代^{さかて}は惜^{をし}まぬ客^{きやく}人^{じん}なり、然^{しか}も美^び人^{じん}を載^のせたれば、屈^{くつき}竟^{やう}の壯^{わか}佼^{かの}勇^{いさ}をなし、曳^ひ々
聲^{えい}を懸^かけ合^あはせ、啜^{なは}て畦^{あぜ}道^{みち}、村^{むら}の徑^{みち}、揉^もみに揉^もんで、三^{さん}里^りの路^{みち}に八^じ九^く時^じ間^{かん}、正^{しやう}午^ごとい

ふのに、峠^{たうげ}の麓^{ふもと}、春^{かすが}日^の野^の村^{むら}に着^ついたので、先^まづ一^{けん}軒^{けん}の茶^{ちや}店^{みせ}に休^{やす}んで、一^{いつ}行^{かう}は吻^{ほつ}と呼^いき。

茶^{ちや}店^{みせ}のものも爐^ろを圍^{かこ}んで、ぼんやりとして居^あるばかり。いふまでもなく極^{きは}月^{げつ}かけて三
月^{さん} 彼^か岸^{がん}の雪^{ゆき}どけまでは、毎^{まい}年^{ねん}こんな中^{なか}に起^お伏^ふするから、雪^{ゆき}を驚^{おど}ろくやうな者^{もの}は忘れ

ても無^ない土^ど地^ち柄^{がら}ながら、今^{こと}年^しは意^い外^{ぐわい}に早^{はや}い上^{うへ}に、今^{いま}時^{とき}尙^かくまで積^{つも}るべしとは、七八十

になつた老^{らう}人^{じん}も思^{おも}ひ懸^がけないのであつたと謂^いふから。

來^くる道^{みち}でも、村^{むら}を抜^ぬけて、藪^{やぶ}の前^{まへ}など通^{とほ}る折^{せり}は、兩^{りやう} 側^{がは}から倒^{たふ}れ伏^ふして、竹^{たけ}も三^{さん}尺^{じゃく}の

雪^{ゆき}を被^かつ、或^{ある}は五^ご間^{けん}、或^{ある}は十^{じふ}間^{けん}、恰^{あた}も眞^ま綿^{わた}の隧^{トンネル}道^ののやうであつたを、手^てで拂^はひ笠^{かさ}で拂^は

ひ、辛^{から}うじて腕^{くる}車^まを潛^くらしたれば、網^{あみ}の目^めにかゝつたやうに、彼^{あな}方^{なた}此^こ方^{なた}を、雀^{すずめ}がぼら／＼、

洞^{ほら}に蝸^{かう}蝸^{もうり}の居^あるやうだつた、と車^{くる}夫^ま同^{どう}士^し語^ごりなどして、しばらく澁^{しぶ}茶^{ちや}に市^{いち}が榮^{さか}える。

聲^{こゑ}の中^{なか}に噫^{あつ}と一^{ひと}聲^{こゑ}、床^{しやう}几^{うぎ}から轉^{ころ}げ落^おちさう、脾^{ひばら}腹^{はら}を抱^かへて呻^{うめ}いたのは、民^{たみ}子^こが供^{とも}

與^よ會^そ平^{へい}親^{いお}仁^{やち}。

こ
這は便なし、心を冷した老の癩、其の惱輕からず。

一 體誰彼といふ中に、さし急いだ旅なれば、註文は間に合せず、殊に少い婦人なり。

うつかりしたものも連れられねば、供さして遣られもせぬ。與曾平は、三十年餘りも律儀
に事へて、飼殺のやうにして置く者の氣質は知れたり、今の世の道中に、雲助、
しらなみ 白波の恐れなども、あるべくも思はれねば、力はなくても怪しうはあらず、最も便よき
は年こそ取つたれ、大根も引く、屋根も葺く、水も汲めば米も搗く、達者なればと、
この老僕を擇んだのが、大なる過失になつた。

いかに息災でも既に五十九、あけて六十にならうといふのが、内でこそはくるく
れ、近頃は遠路の要もなく、父親が本を見る、炬燵の端を拜借し、母親が看
經するうしろから、如來様を拜む身分、血の氣の少ないのか、とやかくと、心遣
ひに胸を騒がせ、寒さに骨を冷したれば、忘れ居持病がこゝで、生憎此時。
ゆきををやみ 雪は小止もなく降るのである、見る／＼内に積るのである。
おぼぜい 大勢が寄つて集り、民子は取継るやうにして、介抱するにも、薬にも、ありあは
せの熊膽位、其でも心は通じたか、少しは落着いたから一刻も疾くと、再び腕車を立
てようとすれば、泥除に嚙りつくまでもなく、與曾平は腰を折つて、礎と倒れて、顔の

いろも次第に變り、之では却つて足手絡ひ、一式の御恩報じ、此のお供をと想ひましたに、最う叶はぬ、皆で首を縊めてくれ、奥様私を刺殺して、お心懸のないやうに願ひます。おのれやれ、死んで鬼となり、無事に道中はさせませう、魂が附添つて、と血狂ふばかりに急るほど、弱るは老の身體にこそ。

口々に押宥め、民子も切に慰めて、お前の病氣を看護ると謂つて此處に足は留められぬ。棄て、行くには忍びぬけれども、鎮守府の旦那様が、呼吸のある内一目逢ひたい、私の心は察しておくれ、とかういふ間も心は急く、峠は前に控へて居るし、爺や！

もし奥様。

と土間の端までゑり出でて、膝をついて、手を合すのを、振返つて、母衣は下りた。一臺の腕車二人の車夫は、此の茶店に留まつて、人々とともに手當をし、些とでもあがきが着いたら、早速武生までも其日の内に引返すことにしたのである。

民子の腕車も二人がかり、それから三里半だらゝのぼりに、中空に聳えたる、春日野峠にさしかゝる。

ものの半道とは上らないのに、車の齒の軋り強く、平地でさへ、分けて坂、一分間

に一寸づゝ、次第に雪が嵩増すので、呼吸を切つても、もがいても、腕車は一步も進まずなりぬ。

前なるは梶棒を下して坐り、後なるは尻餅ついて、御新造さん、とてもと謂ふ。
 大方は恠くあらむと、期したることとて、民子も豫め覺悟したから、茶店で草鞋を穿いて來たので、此處で母衣から姿を顯し、山路の雪に下立つと、早や其の爪先は白くなる。

下坂は、動が取れると、一名の車夫は空車を曳いて、直ぐに引返す事になり、梶棒を取つて居たのが、旅鞆を一個背負つて、之が路案内で峠まで供をすることになつた。

其の鐵の如き健脚も、雪を踏んではとぼくしながら、前へ立つて足あとを印して上る、民子はあとから傍目も觸らず、攀ぢ上る心細さ。

千山萬岳疊々と、北に走り、西に分れ、南より迫り、東より襲ふ四圍たゞ高き白妙なり。

さるほどに、山又山、上れば峰は益累り、頂は愈々聳えて、見渡せば、見渡せば、此處ばかり日の本を、雪が封ずる光景かな。

さいはひかげなく、雪路に譬ひ山中でも、然までには寒くない、踏みしめるに力の入るだけ、却つて汗するばかりであつたが、裾も袂も硬ばるやうに、ぞつと寒さが身に迫ると、山々の影がさして、忽ち暮なむとする景色。あはよく峠に戸を鎖した一軒の山家の軒に辿り着いた。

さて奥様、目當にいたして參つたは此の小家、忤は武生に勞働に行つて居り、留守は山の主のやうな、爺と婆二人ぐらし、此處にお泊りとなさいまし、戸を叩いてあけさせませう。また彼方此方五六軒立場茶屋もござりますが、美しい貴女さま、唯お一人、預けまして、安心なは、此の外にござりませぬ。武生の富藏が受合ひました、何にしろお泊んなすつて、今夜の様子を御覽じまし。此の雪の止むか止まぬかが勝負でござります。もし留みませぬと、迎も路は通じませぬ、降やんでくれさへすれば、雪車の出ます便宜もありません、御存じでもありませんが、此の邊では、雪籠といつて、山の中で一夜の内、ふいに雪に會ひますると、時節の來るまで何方へも出られぬことになりまますから、私は稼げに、家に四五人も抱へて居ります、萬に一つも、もし、然やうな目に逢ひますると、ママや小兒が、を釣らねばなりません、此の上お供は出來かねます。お別れといたしまして、其處らの茶店をあけさせて、茶碗酒をぎうとあふり、其の勢で、暗雲に、

とんぼを切つて轉げるまでも、今日の内に麓まで歸ります、とこれから雪の伏家を叩くと、老人夫婦が出迎へて、富藏に仔細を聞くと、お可哀相のいひつゞけ。

行先が案じられて、我にもあらずしよんぼりと、門にぞいで入りもやらぬ、媚しい最明寺殿を、手を採つて招じ入れて、昇据ゑるやうに圍爐裏の前。

お前まあ些と休んでと、深切にほだされて、懐しさうに民子がいふのを、いゝえ、さうしては居られませぬ、お荷物は此處へ、もし御遠慮はござりませぬ、足を投出して、裾の方からお温りなされませ、忘れても無理な路はなされませぬ。それぢやとつさん頼んだぜ、婆さん、いたはつて上げてくんない。

富藏さんとやら、といつて、民子は思はず涙ぐむ。

へい、奥さま御機嫌よう、へい、又通りがかりにも、お供の御病人に氣をつけます。あゝ、いかい難儀をして、おいでなさるさきの旦那様も御大病さうな、唯の時なら橋の上も、欄干の方は避けてお通りなさらうのに、おいたはしい。お天道様、何分お頼み申しますぜ、やあお天道様といや降ることはく。

あとに頼むは老人夫婦、之が又、補陀落山から假にこゝへ、庵を結んで、南無大悲民子のために觀世音。

その情で、饑ゑず、凍えず、然も安心して寢床に入ることが出来た。

佻しきは、食べるものも、着るものも、こゝに斷るまでもない、薄い蒲團も、眞心には暖く、殊に些は便りにならうと、故と佛間の佛壇の前に、枕を置いてくれたのである。こゝろしづかまくら
心 靜に枕には就いたが、民子は何うして眠られよう、晝の疲勞を覺ゆるにつけても、思ひ遣らるゝ後の旅。

更け行く間に聲もなく、涼しい目ばかりぼち／＼させて、鐘の音も聞えぬのを、徒らに指を折る、寂々とした板戸の外に、ぼざりと物音。

民子は樹を這つた雪のかたまりであらうと思つた。

しばらくして又ぼざりと障つた、恚る時、恚る山家に雪の夜半、此の音に恐氣だつた、婦人氣はどんなであらう。

富藏は疑はないでも、老夫婦の心は分つて居ても、孤家である、この孤家なることは、昔かしがたり
言は、昔語にも、お伽話にも、淨瑠璃にも、ものの本にも、年紀今年二十にな
るまで、民子の耳に入つた響きに、一ツとして、悲惨悽愴の趣を今爰に囁き告ぐる、材料でないのではない。

呼吸を詰めて、なほ鈴のやうな瞳を凝せば、薄暗い行燈の灯の外、壁も襖も天

井も暗りでないものはなく、雪に眩めいた目には一しほで、ほのかに白いは我とわが、
 梯に立つ頬の邊を、確乎とおさへて枕ながら幽にわななく小指であつた。

あなわびし、うたてくもかゝる際に、小用がたしたくなつたのである。

もし。ふるへ聲で又、

もしくと、一聲三聲呼んで見たが、目ざとい老人も寐入ばな、分けて、罪も屈
 託も、山も町も何にもないから、雪の夜に静まり返つて一層寐心の好きさうに、軒
 も聞えずひツそりして居る。

堪りかねて、民子は密と起き直つたが、世話になる身の遠慮深く、氣味が悪いぐらゐ
 には家のぬし起されず、其まゝ突臥して居たけれども、さてあるべきにあらざれば、恐
 々行燈を引提げて、勝手は寢しなに聞いて置いた、縁側について出ようとすると、
 途絶えて居たのが、ぼたりと當つて、二三度續けさまにばさ、ばさ、ばさ。

はツと唾をのみ、胸を反して退つたが、やがて思切つて用を達して出るまでは、まづ
 何事もなかつた處。

手を洗はうとする時は、民子は殺されると思つたのである。

雨戸を一枚ツト開けると、直ちに、東西南北へ五里十里の眞白な山であるから。

如何なることがあらうも知れずと、目を瞑つて、行燈をうしろに差置き、わな々きノ柄杓を取つて、埋もれた雪を拂ひながら、カチリとあたる水を灌いで、投げるやうに放したトタン、颯とばかり雪をまいて、ばつさり飛込んだ一個の怪物。

民子は思はずあツといつた。

夫婦はこれに刎起きたが、左右から民子を圍つて、三人六の目を注ぐと、小暗き方に蹲つたのは、何ものかこれ唯一羽の雁なのである。

老人は口をあいて笑ひ、いや珍しくもない、まゝあること、俄の雪に降籠められると、朋に離れ、疇に迷ひ、行方を失ひ、食に饑ゑて、却つて人に懐き寄る、これは獵師も憐んで、生命を取らず、稗、粟を與へて養ふ習と、仔細を聞けば、所謂窮鳥懐に入つたるもの。

翌日も降り止まず、民子は心も心ならねど、神佛とも思はるゝ老の言に逆らはず、二日三日は宿を重ねた。

其夜の雁も立去らず、餌にかはれた飼鳥のやう、よくなつき、分けて民子に慕ひ寄つて、膳の傍に羽を休めるやうになると、はじめに生命がけ恐しく思ひしだけ、可愛さは一入なり。つれ／＼には名を呼んで、翼を撫でもし、膝に抱きもし、頬もあて、夜は衾

ふところひらに懷を開いて、暖い玉の乳房の間に嘴を置かせて、すやくと寐ることさへあつたが、一夜、凄じき寒威を覺えた。あけると凍てて雪車が出る、直に發足。

老人夫婦に別を告げつつ、民子は雁にも殘惜しいまで不便であつたなごりを惜んだ。神の使であつたらう、この鳥がないと、民子は夫にも逢へず、其の看護も出來ず、且つやがて大尉に昇進した少尉の榮を見ることもならず、與曾平の喜顔にも、再會することが出來なかつたのである。

民子をのせて出た雪車は、路を迂つて、十三谷といふ難所を、大切な客ばかりを千尋の谷底へ振り落した、雪ゆゑ怪我はなかつたが、落込んだのは炭燒の小屋の中。

五助。

権九郎。

といふ、兩名の炭燒が、同一雪籠に會つて封じ込められたやうになり、二日三日は貯蓄もあつたが、四日目から、粟一粒も口にしないで、熊の如き荒漠等、山狗かとはかり瘦せ衰へ、目を光らせて、舌を嚙んで、背中合せに倒れたまゝ、唸く聲さへ幽な處、何、人間なりとて容赦すべき。

帯を解き、衣を剥ぎ、板戸の上に縛めた、其のありさまは、こゝに謂ふまい。立處

其その手足てあしを炙あぶるべく、炎えん々くたる炭火すみびを熾おこして、やがて、猛獸まうじうを拒ふせぐ用意よういの、山やまがたな
 と斧をのを揮ふるつて、あはや、其胸そのむねを開ひらかむとなしたる處ところへ、神かみの御手みての翼つばきを擴ひろげて、其膝そのひざ、其
 手て、其肩そのかた、其脛そのひざ、狂くるひまつはり、搦からまつて、民子たみこの膚はだを敵おほうたのは、鳥とりながらも心こゝろありけ
 む、民子たみこの雪車そりのあとを慕したうて、大空おほぞらを渡わたつて來きた雁かりであつた。
 瞬またく間に、雁かりは炭焼すみやきに屠ほふられたが、民子たみこは微傷かすりきずも受うけないで、完まつたき壁たまの泰やすらかに
 雪ゆきの膚はだは繩なはから抜ぬけた。
 渠等かれらは敢あへて鬼おにではない、食じきを得えたれば人心地ひとごちになつて、恰あたも可よし、谷間たにあひから、いた
 はつて、負おぶつて世よに出でた。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷六」岩波書店

1941（昭和16）年11月10日第1刷発行

1974（昭和49）年4月2日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の翼

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>